

Abstract

Background : 自家骨軟骨柱移植術 (mosaicplasty) は、離断性骨軟骨炎に対し広く行われている手術法であるが、肘離断性骨軟骨炎に対する有用性はまだ明らかにはされていない。本研究の目的は、10代運動選手の進行期離断性骨軟骨炎に対する mosaicplasty の有用性を明らかにすることである。

Methods : 2001年から2006年までに当科にて、進行期上腕骨小頭離断性骨軟骨炎に罹患した10代の競技レベルの男性運動選手19例に対し mosaicplasty を施行した。平均年齢は14.2歳。手術は、骨軟骨柱 (平均3.7 mm 径) を大腿骨外顆の膝蓋大腿関節面外側より採取 (平均採取数3.3本) し、肘骨軟骨欠損部に移植した。術後平均45ヵ月の時点で、各症例に対し臨床および画像的評価を行った。

Results: 19例中18例で疼痛は消失し、残り1例で軽度の疼痛が残存していた。平均肘可動域は術前 $112^{\circ} \pm 17^{\circ}$ から $128^{\circ} \pm 12^{\circ}$ へ有意に改善していた ($p < 0.005$)。Timmerman & Andrews の臨床評価スコア (200点満点) は、術前 131 ± 23 点から 191 ± 15 点に有意に改善していた ($p < 0.0001$)。1例を除き excellent or good 評価であった。Lysholm 膝評価では、全例ドナー膝は excellent 評価であった。2例を除く他の全例が術前の競技レベルへのスポーツ復帰が可能であった。X線、遊離体形成や関節症性変化を認めたものはなかった。

Conclusions: 今回得られた中期術後成績は、mosaicplasty が10代運動選手の進行期上腕骨小頭離断性骨軟骨炎に対し、満足すべき臨床成績を与えることを示唆するものである。